

世毛玄び

王子稲荷神社

北区岸町1-12-26

(郵便番号 114)

TEL (3907)3032番

FAX (5993)6850番



闇を打開するものは「ともしび」であります。

人生の闇、邪悪苦難を打開して、私達を幸福の彼岸に導いてくれる「ともしび」、それは、神の守護であります。

私達は、この「ともしび」を信じてこそ、「一寸先は闇」の世を安心して進み、明るい未来を望んで、現在を楽しく暮すことが出来るし、そこに幸福が生れるのです。

「信仰ある所、必ず、神助あり」の信念に立てば、不安は消え光明に満ちた生活が開けます。先賢の訓に「神は人の敬によりて威を増し、人は神の徳に依り運を添う」とは、このことでもあります。そして、この「ともしび」を見出す道が信仰であります。境内に、稲荷の神徳を讃えた古碑があります。

かくてこそ、祈るかひあれ衣食住、

なに、くらからぬ三つのともしび

これこそ、信仰の徳を讃え、幸福への道を教えるものです。



王子稲荷神社由緒記

東京都北区岸町鎮座

御祭神

宇迦之御魂神

宇気母智之神

和久産巢日神

例祭

二月初午の日

御祭神は、世に「稲荷大明神」と称え奉る衣食住の祖神で、古来

産業の守護神として、広く庶民がおまつりする神さまであります。

王子稲荷神社は、今から一千年

の昔「岸稲荷」と称して、この地にまつられたお社で、社記に

庚平年中、源頼義、奥州追討の

砌り、深く当社を信仰し、関東

稲荷総司と崇む

と、伝えており、西暦一〇六〇年の平安朝中頃には相当の社格を有

していたものと考えられます。

元亨二年(一二三二)に近隣の地に領主豊島氏が、紀州の熊野神社

を勧請し王子神社を祀った処から、地名も王子と改まり、当社も王子稲荷神社と改称されました。

小田原北条氏は当社を深く尊崇

し、朱印状を寄せており、江戸時代には、徳川將軍家の祈願所と定められて大層栄えました。

代々の將軍の崇敬は、極めて篤

く、社参は勿論、三代將軍家光公は、寛永十一年に、社殿を造営し

正遷宮料として金五拾両、その他諸道具一式を寄進せられ、次いで

五代將軍綱吉公は元禄十六年に、

十代將軍家治公は天明二年に、それぞれ、修繕を

寄進されましたが更に、

十一代將軍家齊公は文政五年(一八二二年)に、社

殿を新規再建されました。

八棟造り極彩色の華麗な社殿は、江戸文化の最

高潮、文化文政時代の粹を伝え、当時の稲荷信仰

の隆昌が偲ばれます。

然し、惜しいことに、この度の大戦中、昭和二十年四月十三日、空襲によつて本殿など大破しました。

その後、昭和三十五年

に本殿の再建が行なわれましたので、現在の社殿は、拝殿幣殿は文政五年の作、本殿は昭和の作ということになります。

又、昭和六十二年には、社殿の総塗り換えが百六十五年ぶりに行なわれ、神楽殿も新規に建て替えられました。

翻つて、沿革を尋ねますと、江戸時代は、所謂「神仏習合時代」で、当社の御祭神についても、新編武蔵風土記、江戸名所図絵等に「本地は聖観世音、薬師如来、陀

枳尼天なり」と記されています。

王子稲荷神社は、明治維新まで

禅夷山東光院金輪寺が別当として

王子権現(王子神社)と共に管掌し、住民は「王子両社」と称して等しく、氏神として崇めて来しました。

現在は明治政府の神仏分離政策により廃仏棄釈が行なわれ、金輪寺そのものは二坊を残して廃寺となつています。

当社へは遠方よりの参拝者が多く、諸方の街道筋に「王子いなりみち」という標石や、奉納石灯籠が建てられて、参詣人の道しるべを務め、又、飛鳥山の桜の花見をかねての行楽客もあり、門前には茶店、料理屋等が数多くありまし



た。そのうちの一軒は今でも現存しており、道しるべの灯籠の一部は境内に移築保存(昭和三十一年)されています。

境内は台地の中腹にあつて、約二千坪、今では市街を見渡す眺めのよい高台ですが、昔は、こんもりと茂った杉の大木に包まれて、昼も暗く、山中には沢山の狐が安住し、神使として大切にされていました。その跡は、今も、「お穴さま」として保存されています。狐に因む伝説は数多くありますが、料理屋と狐を舞台にした「王子の狐」の落語は当時の模様をよく伝えています。

又、江戸名所図絵、東都歳時記、新編武蔵風土記に記載する、毎歳十二月晦日の夜、諸方の狐影しく、ここに集り来る事、恒例にして今に然り。その灯せる火影に依つて土民、明年の豊凶を卜す。云々」という伝説は、最も有名で「装束榎」は、これらの狐が、身仕度をした処と伝えられる場所です。

「装束の榎まで持つ王子なり」

(東鳥)

という句も残っており、その跡には、装束稲荷の祠が建てられています。

徳川幕府代々の將軍家の厚い保護と共に、大老田沼意次が立身出世したのは、屋敷に稲荷が祠つてあつたからという評判によることもあつて、庶民の中に稲荷信仰が大層盛んになり、中でも王子稲荷の商売繁昌と火防せ(ひぶせ)の御神徳は広く知れわたる処となりました。そして、江戸中期より二月の初午には「火防守護の風守」が授与されるようになり、これを祀ると火難を免れ、息災繁昌するとて社頭は賑いを呈し、これに因んで、縁起の風を商う風市が境内で開かれるようになり現在に至り、東京名物となつています。

奴風が御守りになつてゐる由縁には、江戸期の火消しの印袴纏と奴風の姿が結びついたものとか、或いは、風は風を切るといふ処から火事を防ぐ御守として採り上げられたとか、言い伝えられています。

社宝には、絵画に、近世の大家柴田是真の「茨木」の扁額があります。これは、天保十一年のもの、作者の出世作といわれる名品で、昭和九年九月一日、文部省から重要美術品に指定されました。

この図柄は、

「その昔、羅生門に出没して、京の民衆をおびやかしていた鬼女があり、渡辺綱という武將によりやうく退治されたものの、その七日後、渡辺の綱の伯母にばけて訪れ、その折に切り落された自分の片腕を

取り返すやいなや、元の鬼女の姿に戻り、地をけて空に舞い戻ってしまった」とという話の最高の場面を描いたものです。

奉納者の砂糖問屋組合は、当時天保の改革で各方面の肅正をしていた幕府に對して、商権回復運動をしていたので、とりあげられた商権を鬼女の腕にたとえて大願成就の願意を籠めたものであるという挿話が伝えられています。

拝殿の天井には、幕府の御殿絵師・谷文晁の「竜」の板絵が二枚



